

安政  
己政  
公私  
襍録

二月廿日  
船岩溪頭  
一巻

洋学文庫  
文庫8  
A102







安政四年丁巳二月廿日山性以弟井修理為  
沖用女列來可

刈田郡白石本柳之食山屋主山岩次郎  
孝養并悍岩五郎後離之次第委細別  
錢書拔道可特之若持正系太仍持小之  
長篇之在後可身入

沖覺尤俗人可身所く亦通以流作方仕勸  
善之山一端以遊度方世也  
伴出者其山乃子連福之脱一可也指也  
此其申也山也之謹言



小十郎ト中出り有父政八年右小十郎ト方名貴  
譽俵仕米或俵其止辰日昭多吉承り順  
中出り有猶父仍我多承拔少受其後孫ト孝  
心深く浦助ト父政十二年八拾四ト年ト中風ト  
症在疔ト是ト自由トお承止ト元坐ト應ト以ト耐ト赤  
蓮ト歩ト切ト少ト急ト孝ト養トお承ト由ト二ト名ト出ト貴  
此年ト及ト右ト多ト吉ト承ト此ト町ト回ト心トトト中ト出ト此ト町ト有トお  
承り有ト卑ト賤ト者ト奇ト特ト多ト承ト右ト名ト出ト貴ト自  
五ト貴ト父ト回ト人ト妻トトト智ト目ト三ト貴ト父トトト多ト承ト右ト名ト出ト貴ト自  
年八月十八日此町有り男洋権方丈宅トお承り

此町回心此中後し

右岩次郎中出書有た

刈田野白石也

乞食山倉主

山岩次郎

日人妻

右ト者ト先ト父ト浦ト助ト年ト母ト存ト生ト中ト深ト切ト事ト以ト承ト  
小ト存ト主ト中ト回ト者ト中ト出ト奇ト特ト多ト承ト右ト名ト出ト貴ト自  
智目五貴父妻ト回三貴父ト多承右名出貴自

○





由是之為多矣遠由中少其人。箇者上言親  
敵之名乘上。心乃。一。石。打。以。身。  
如。一。以。左。肩。打。者。以。身。不。應。棒。之。以。  
即。上。打。之。一。勝。之。突。之。交。之。時。直。相。之。回。之。身。  
打。之。以。棒。之。以。上。又。一。身。之。也。二。打。之。一。棒。三。打。  
之。以。交。之。人。之。揚。之。棒。之。打。之。之。拾。之。以。打。向。岩。  
五。中。使。棒。之。打。之。之。一。生。無。命。一。打。令。以。交。敵。之。而。之。  
岩。之。中。一。之。人。之。勢。力。也。難。敵。已。之。老。之。亦。年。之。打。殺。  
之。之。一。就。之。仇。之。可。復。也。事。之。一。及。是。之。亦。番。店。之。  
編。指。之。拔。逆。之。咽。之。切。之。上。一。之。急。不。之。亦。之。例。

此トと箇者有呼之聲を立無出以有出也  
交後若若之是也月無轉之交ヲ咽ト切付也人其  
仕為以反回躬肝入方ト出候ト亦也ト以有以礼也  
上昇賤之者奇特ト予ト以旨重以少ト山中夜也  
以町有以河也亦以役人亦也ト以有以也ト以也  
以也中夜ト以交平人ト以也ト以ト士分ト以也ト以  
事下禮ト者ト以ト下抄ト者ト也ト以也ト以也ト以也  
以也  
公名ト以程也ト以何也ト以交士分ト以勿備  
百姓町人ト以交ト以程也ト以何也ト以交士分ト以勿備  
亦ト風也ト殺ト以月梅多ト人ト亦也ト以也ト以也



此石海濱有以味上永世名曰五君文以之  
可然成亦向交承世名曰七君文了之  
仰出有安政三年十二月十日  
得以此海之

左岩五郎中海書丸

刈田郡白石本心

乞食山急主死也

岩波中悻

岩五郎

右之者父岩次郎也及殺害山富若直抄以

始末之上江島上流罪業如仍山後乃山所造去  
之壯者為三國山之松と南人を討果父と雖も山後  
孝烈奇特之玉似之為山後名永世名曰七君文  
以之

一君有片倉小十郎子女二おあて七左岩五郎  
其子一生此人持お代三君文永くお世に譽  
順お世に

安政四年二月廿日寫了 磐溪堂謹記

歲丁巳二月，扈從頭若林友輔逆傳。公命曰：刈田郡白石，丐頭岩二，孝養及其子岩五，復讐洵為近今美談。汝清崇其綴，作長篇歌行，以供覽焉。且命曰：其辭取易入俗耳，不必要粧飾，蓋欲以為勸善之一助也。臣清崇謹奉命，乃製孝句行前後二篇，以奉呈。時三月上巳之日也。

前孝句行

句又作丐，古泰切，乞也。

天之降才非爾殊，王公乞丐有種乎？却恠紈袴乏孝子，至性多是在匹夫。東奧白石有孝句，兒曰岩二父浦介。至孫岩五最可驚，一擊復讐何其快。嗟哉宮城信夫誰

家女作歌新傳一佳話，磐二純孝出天性，齷齪克服爺孃誨，及至成童，愈篤親之所愛，已亦愛。每日沿門乞一錢，歸來纔能辨魚菜，到頭不唯養口體，承其歡心，匪敢懈。母病在床可奈何，夙夜看視不解帶，其妻志如妻亦同志，蓬首何遑掃眉黛，何罪于天母終沒，欲償其罪唯父在。八十餘齡雖未耄，身病中風奈潦倒，性好捕魚老未休。洿池川澤無不到，夫妻助之盡心力，或携或負巧相導。江魚活潑獲則供，為羹為炙唯所好。城主片倉氏聞之太感歎，與米二苞勸其孝。事達于公郡吏按，果然孝義不待贊。文政己丑八月日，而尹之宅下賞判褒曰

奇特給青錢。罄則五貫。妻三貫。至孝如斯。真難得。况乃  
微賤在乞食。嗟哉。水魚。雪筍。何足以。二十四孝。欲無色。

孝子後孝不匱錫滿。小岩復警。可無記。安政之元二月初。

沿街鼓噪。大黑戲。春日。淫夕。陽痛飲。城南賣酒肆。

小岩先歸。大岩留。醉來去向圓明寺。地忽有惡漢。遮途

出。汝何為者。一聲詰。自稱癩院流寓者。甲呼。近松乙富

吉。二聲三聲。耳喧嘩。寸鐵尺挺。鬪未畢。小岩聞之。趨往

視。阿爺已斃。血流溢。急入癩院。捕近松。追獲富吉於本

宮驛。訴之。警迹泣且請。此二人者。實殺翁。公議獄成。屬

流竄。檻車遠送江島東。岩也。竊謂流丐兒。一朝逃島未

可知。即日潛形尾踪。跡壯。鹿郡中。日徘徊。隔海遙對三

國山。山上安置茅六天。流人如逃。孤島去。豈陸定存阿

那邊。明年三月廿八日。大雨無人。晝寂然。一條細路。排

草徑。瞥然認得二兒顏。父之警也。汝記不。諾声未畢。石

爭投。三尺大棒。持在此。一擊。欲碎二人頭。棒斷為三。各

拾一。神出鬼沒。鬪未收。岩也。勢孤。殆不免。急拔腰刀。刺

其喉。松僵伏地。富欲走。一蹶。忽被藤蔓留。直前乘虛擊

便死。多年蓄怨。今始休。郡吏具狀告偉。舉理官沈吟。微

令古。如使岩也。生良家。擢列士班。固其所。無奈版藉屬

匪人國有常憲難私屬乃錄賞錢請之君不知何數得  
平分若公特斷旌孝烈永世給賜七貫文儻臣儻  
作歌曲謹綴鄙辭二但使舉國能傳誦一新忠孝  
舊風俗

臣大槻清崇謹稿

下田開港以來異船入津託丁巳開港日存并字記

一寅二月廿五日入港同日晦日出帆

亞里利かフレガット船

船名 不ニテヤ

船主 ホーブ

乗組 廿五人

大砲 二十門

同日

同運送船

安政元  
寅年

船名 サウタンポン

船主 ボイレ

乗組 七十五人

大砲 五門

右、條約書に極東諸島以下南洋東部南洋  
群島の一見として神奈川沖合泊来

一寅三月十八日入港回六月二日追帆

五、有利の運送船

船名 シンプレイ

船主 シンゲレイ

大砲 四門

一寅三月十八日入港回四月十日某波と向ケ出帆回音

十、泊来回六月初日追帆

回運送船 但し再泊

船名 サウタンポン

一寅三月廿日入港回四月十日某波と向ケ出帆回音

十二、泊来回六月初日追帆

回蒸氣フレイト船

船名 ホウハタ

使節 ヘルリ 官コモトル

船將 マックル子

次官 ベント 此者始終有橋、穿、破、ん

通辨官 ホツテメン

乗但 三百五十人 内水夫、人、常、在、市、病、死、  
柿、浮、村、玉、出、古、人、埋、葬、

大砲 九門

船長 四十間船

同邦

同蒸氣フレグット船

船名 ミスミスシロ

船主 リー

乗但 三万人船

大砲 九門

一寅三月廿日入港同四月十日若彼ト向ケ返去 二月海東  
三船并後

同フレグット

船名 フンデリヤ

一寅三月廿一日入港同四月八日返去

同運送船

船名 レクミングトン

船主 ガラスン

大砲 四門

右船に於横濱條約書を呈せ給ふに當りて是日  
午後使節並に船長が船内を巡視し條約を檢  
査す

一 寅四月六日入港同日十日午後三時向て出帆回航  
十六日泊米回六月十日出帆

亞里利加フレガト船

船名 マサドニヤ

船主 アブボット

乗組 廿五人

大砲 二門

右條約書を呈せ給ふに當りて三月十日武蔵野山沖

出帆無人島に於て海軍

一 寅六月廿六日入港同日出帆

亞里利加商船 サラランニヤ

船名 レディピールス

船主 ホルロース

乗組 十八人

船長 山崎河路

大砲 四門

右使節ペルリニヤの来泊するに當りて是日

寅六月十七日山崎沖に乘入浦野に碇泊す

回所出帆者港近く乗来りて風吹かす程又  
浦賀に乗入り所廻りて水先へ若附戻り  
廿六日港灣流人城内國岩船最極具村  
百姓重中博勇に申渡海船交り

寅月七月廿三日入港回八月三日迄

亞里利加蒸氣フレグト船

船名 美多六ニ十

船將 フロナニ

乗組 三百中人

由是人洋中より病死極端  
村玉島等にて葬

長サ 二百七十四フット 甲子右方路

大砲 九門

右は唐國香港へ帰國掛船中缺之る急之深

寅月七月廿四日入港回八月十日迄

亞里利加運送船 廿一月内来又三月内来

船名 サウタニホシ

右は香港へ石炭積来者港に於て

美多六ニ十 美多六ニ十 兩船積移し船

寅月七月廿五日入港回八月十日迄

亞里利加蒸氣フレグト船 廿一月内来

船名 美多六ニ十



漂流人等おのり園那は三官村出生三八幼倉吉  
名若兼親居るは悔ふも志守年々守り立  
たふ美々シ十船向は香港へ海米缺乏して  
海米

一寅十月廿日返東

魯西西アレカツト船

船綿 テイヤナ

使多 プーヤーチン

船将 リソスケ

次官並通つ初官。オセツト官をタイロイテナト

兼担 五百七人 由水夫三人備中兼 高死

長十 三十三名級

大砲 五十三門

大條約の名格返東船中寅十一月曾津浪  
名被損不出東陸名及して是州戸田村港迄  
修及て三月廿六日當陸出帆十二月二日駿河  
中多島村沖多陸船風沈没ス

卯二月廿日要量利加船カコライニイフトを信受  
魯西西士官九人下官百五人兼親戸田村出帆  
中園ト悔ふ卯三月廿日戸田村多製船をこしスライル

船、使多一、子船將之、士官六人、下官四人、  
 船乗出帆、卯六月三日、アメリカ船、ゲレク、を借受  
 滿、め、者、少、海、乘、船、戸、回、港、出、カ、ム、カ、ト、主、海  
 馬、丑、午、火、蒸、氣、船、之、た、之、は、捕、獲、者、を、送、り、由  
 宣、十、月、九、日、入、港、卯、三、月、六、日、出、帆  
 西、島、利、如、蒸、氣、船、之、カ、ト、船

船將 ポウハセ

使多 P-ダムス

船將 マッセル子

道、南、官、ニ、ヤ、ト、お、送、り、者

乗組 三百人、  
内、海、軍、中、水、支、遣、人、病、死、  
 五、十、名、に、達、す、

大砲 拾門

右、神、宮、川、之、を、極、之、傳、約、本、書、の、を、船、乗、  
 卯、正、月、廿、日、有、信、元、辰、の、高、附、海、軍、書、二、機、  
 持、り、去、り、音、比、及、海、軍、之、船、を、持、り、送、り、

宣、十、月、廿、日、海、軍、回、港、出、帆

佛、多、馬、西、鯨、漁、船

船將 十。ホレオン。デルテ

船主 ロベース

乗組 四拾九人

大砲 二門

九月廿一年亞里利加船... 船主 山ノイノ

安政二年

二月廿日廿日(港)二月廿日廿日

亞里利加商船スライ子ル 得サラニニス...

船号 カロライニイノト

船主 山ノイノ

乗組 廿七人 内男十二人女三人小兒二人

長サ 十六百尺

左形曹西五人... 船主 山ノイノ

卯二月廿八日入港 卯二月廿九日出航

亞里利加商船

船号 ヨシグメリケン

船主 バブモツ

乗組 四十八人外士官五人

船長 四百八十フット 四十二百路

回巾 五中フット

大砲 二門

九月廿四日捕魚して商人を乗せ河口に積りて  
お返し渡りて對候に船は急流に水夫商人  
を乗せ其等船中佛多西都也格中乗向人  
を忍れ船中不及以被候事本船

卯三月廿四日卯申日廿七日出帆

佛多西軍艦

船名 コスタニティン

船將 モーラール

船長 百六十フット廿七路中四十八フット

乗組 二百七十八人

大砲 二門

大港口に碇泊し陸軍を乗せしるに備へて  
西船を乗せしるに備へて長流に向ふに帆

卯三月廿七日卯申日廿九日出帆

佛多西軍艦 但二本船

船名 コスタニティン

船將 ボテアン

乗組 30人

船長 百七十五フィート 三十九百ポンド

大砲 六門

三月四日乗組船の同乗船三隻をテネリカ州向に  
尋ねて由碇泊し食料を乏しきと長崎向に帆

卯三月廿七日八港回りの乗組船

亞里利カフカット測量船

船号 ヲウニセニス

提督 ロッナル 官フモトール

乗組 百八十人

船將 ロー

船長 百四十フィート 三十三百ポンド

大砲 八門

卯三月廿七日八港回りの乗組船

三月廿七日八港回りの乗組船

亞里利カ 内車蒸気船

船号 ヘニコック

船將 スターウニス

乗組 七十五人

船長 百三十五フィート 廿八百ポンド

大砲 四門

右海岸測量に於て是江戶表に書納

し

蒸氣船を以て戸田村浦に於て魚人捕向を為  
す所なり此中五艘あり是等之を押入船城

卯四月十日入港同日十日戸田村に於て航  
向未同日十日返航

亞墨利加商船

船号 カラスノイフート

右の船より戸田村浦に於て魚人為業なり此船

上返り船に上手波四月十日戸田村に於て航  
向未同日十日玉島寺浦に於て魚人男女等約百餘  
名出航

卯五月廿一日入港同日廿一日返航

亞墨利加運送船

船号 ケレター

船將 トウロ

乗組 十三人

船長 九十七才ト 十六才

右の玉島寺浦に於て魚人を以て船長乗組等

廿六日戸田村にお出立六月三日の日の船に英人  
が船長兼船主出帆カムロット名海軍英人  
が台捕唐國にまゐり

但し左船曾西國の物来と積るゝが船主  
は揚子江の船主西人出立にまゐり西  
双方の船主を尋ねて船主村に船主を尋ね

卯六月三日入港同日廿六日退帆

要利加商船 船主 スターズル船

船号 パルメット

船主 左ルヘイ

乗員 十二人

船長 万々フート 十七日退

回中 サニフート

大砲 一門

左船水倉料船中缺乏の船主

卯七月七日入港同日廿九日退帆

要利加商船 船主 スターズル船

船主 ブラーミン

船長 八十五フート 十四日退

巾 二十二フート





安政三年

引物... 唐國... 辰二月十六日

辰二月十六日

西里利如商船

船号 アイビロト

船主 リンケン

長サ 九十七フート 十六号

乗組 十五人 内船主妻 子小女三才

右缺少... 石寒天ホ...

石寒天ホ...

辰二月廿六日...

西里利如...

船号 ヘリケン

船主 レンケ 士官一

長サ 八十フート

中 二十フート

十二斤ボート...

四斤ダライ...

士官三人...

外科一人

乗組 二千七人 田舎人五人

大船十隻 以て英國廿八日に出帆 十日以上は長崎に  
二日滞船 夫が者存之を為る 海軍に缺乏する  
おつて 米限下向て出帆

七月廿七未上刻入港 八月六申上刻出帆

要利の内車蒸氣船

船号 サンヂヤシト

船将 ベル

長サ 二百廿一フート 三千二百石

巾 六千石

大砲 十三門 三千二百斤 十一門

コシラゼキル 砲トウセント 八人

通る相官 ヒースケン

乗組 四百五十人

外に唐人七人中七人 洋中馬船船長を助揚ル

コモドル 砲アーストロング人

但し船長向て少尉軍艦指揮と為る乗組

右ハコシニル下田中を乗る為る英國廿八日の海軍

コシラゼキル 砲アーストロング人 七人 馬船中 佐佐木

旗竿お達り上りサハハク向て出帆ス

辰九月初日巳刻入港同日三時刻出帆  
阿多事代内車蒸氣コルツト船

船号 ヌテヤサ

コマンダント 官 万一 三ノス

大砲 十九門

右ノ者八月二十日長崎着出帆第陸ノ八ノ鐘音程  
十日以前同名出帆と御申事大風と云々以事  
者港ノ入は下回也事々為海軍事是下又  
七清ノ向ケ出帆と云々申事

辰九月七日辰刻入港同日午上刻出帆

亞里利カ スクイ子ル商社 卯十月泊来此為事

船号 ゼ子ラルヒール

右ノ者波ノ出帆者港ノ事物也知事者為事  
船ノ元事小名事ハ事也事々事々事

辰十月十一日申刻入港同日十月十七日辰刻出帆

船号 西五コルヘツト船

船号 フリウツサ

使節 ホスセツト

船将 リムスキー元サマフ

船長 万中フート

中 三平カト

乗組 四五人

大砲 廿二門

大和國アモルガ出帆十日以テの果波ノ地城  
條約切立ルル時ニシテ此港ニ泊ル事  
十日無降地事多智也属以又戸田村ニ到ル事  
ニスルニ此船返上ニシテ士官以人乗組但中  
此船ニ乗ルニスルニ船上一回付之具立寅  
年一デイア子船方卸事也大砲五十二門此  
就上スルニ港出帆マカラニ航一マカカ

安政四年

船名ニカ

己二月十四日入港 同三月廿三日出帆

亞里利加商船

船号 ヌスニルビルク

船主 ホール

船主 ホール

船長 二平一尚

船主妻 少供二人

大和國アモルガ出帆ニ入ルル事也

平一札と事

下回港に入港候はる國船乗組は若き養生  
運動のため毎朝七里の内游歩候はる事  
月水金休向はる事

一夫人遊歩は市街に物訪はる事  
聖地無事候可候人志は禮に立入る事  
若しは押入はる事材役人并は是  
右役人下回に候はる事

但し一人は法に候事及は時刻  
は候事



おと遠矢無きは在仍名名年昔領民お村中  
連中一札之申中交如件

安政四年五月

天野繁右衛門知事

豆持賢右衛門伏村

お村中十右衛門

今川連中

下田  
津奉行所

廣東に於ては判じ取書之申す様又字和解  
長崎の申すは高層を乞ふ様

於申す島々八万五千七百第二月廿四

安政  
四年

二月の初め領事官中上名者申す海軍と和京

之商船等三十五隻一船を以て別取戻す

唯我々出控るる秘に海軍に於て廣東英人

之を以て開争する起るる事其趣は是に於て所し此英人

奪取の事アトシラシ各 是は此年長崎に  
返りて英國船長 一白之軍艦 廣東に  
在りて

中山右兵衛英人との條約を以て廣東に於て

お守り申す申す起るる事其趣は是に於て

お守り申す

領事官 之に於ては

三月













通合く心は遠くは唐人の心也 記旅の遠くは唐  
方は南往くは是四十八時を以て返る事なりし  
沙信の言及る事也然るに此方無き返る事なし  
七十一日初午に軍兵の上陸せし是時未だ船は未だ  
大砲の釘打大匠石一錠在唐軍兵の返る由は  
是年之面議の事也返る事承知致るは返る事なし  
當時重なる事あり返る事承知致るは返る事なし  
軍艦の白蒸気船ハルウタハ有わぬ一丸也是日  
多ふは向は左に上る返る事なし 廣東の國境  
林市名あり是より左に左に軍艦の返る事

投丸の事及一唐軍の曲輪を打崩し以上七十一日昇  
其外士官七人ありは傷を負ふ者ありは不  
と彼人の傷を負ふ事ありは面會ありしに乘取  
料を不放棄致しなりは彼人の居宅を焼却し  
此の回復する事返る事なしは申實唐軍の返る事  
時に老幼男女の死亡ありは實に不仁に非ざる  
及此の事ありは返る事なしは先王の御前ありし  
面會の事ありは返る事なしは軍艦は各々中  
然る唐軍の返る事なしは初に西軍艦は唐軍  
港に泊りたる事ありは唐軍の上陸せしは唐軍の返る













第一ヶ条

日本國肥前長崎の湊を亞米利加船の爲に開き其地ニおありて多量の取扱を得以テ新水食料或ハ欠乏あるを給一 石炭あるを又吏官と濫せし一

第二ヶ条

下田并米飯の湊を亦テ亞米利加船必用の各日本におありて海防を爲し其地を併せし爲し亞米利加土人を於テ三港小量の日金銀を其の下官吏と米飯の湊に置し其地を併せし

但此ヶ条ニ日本安政五年年六月中旬今衆國

子八百五十八年七月四日施行す

第三ヶ条

亞米利加人持來るる所の貨幣を計算せし時日本金銀を或ハ銀を其を日本分銅の正しきを以て其ハ金銀銀之秤一 亞米利加貨幣の量目と定め給し其後以テ其の爲る其の法を日本に治め給す

第四ヶ条

日本人亞米利加に對し一法を犯す時ハ日本の法を以て日本に對し一 亞米利加人日本人に對し

法を犯す時、亞米利加の法及そのコミニルゼラール或  
コミニル四時を以て

第五ヶ条

長崎下田米穀の積少ありて亞米利加の破損を後  
以又買ふ交の借欠之取代ホ金或ハ銀の代幣  
を以て償ふべし。其金銀幣所付せしむ時、お物を  
以て弁せしむべし。

第六ヶ条

合衆國のキキセルニシテコミニルゼラールハ七里界外ハ出づ  
程あるものを日本政府におかめて弁せり然し、

船形ホ切迫の場合、これに其程を有利とせ  
延き、その下田を以て其程を以て此におかめてコミニルゼラ

ール取戻せり

第八ヶ条

商人が其物を買ふに、キキセルニシテ  
コミニルゼラール并館内や其者取戻りしとせ  
るを用弁するハ銀或ハ錢を附設せしむべし

下田奉納ハキキセルを以て合衆國のキキセルニシテ  
コミニルゼラール也。日本院を以て其は其真義ハ條ハの  
条條條條文を以て其也。

第九ヶ条

前ヶ条の内第二ヶ条ハ記述所の日ハ其船各約定書  
日ハ其也。

右ノ条ニ日本郵政四十年五月二十六日亞米利加合衆  
國千八百五十七年六月十七日下田法用所ニおきて  
兩國ニ金控調停せしむるもの也

井上信澄を判

中村出羽を判

郵政四十年七月十日備中守廣杉下新野尾官吏を以て  
多治守之丞を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て  
守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て

守多治守之丞

評定所一在

海防所

備中守廣杉

下田守廣

新野守廣

亞米利加官吏出府ニ至ル所治守之丞を以て守多治守之丞を以て  
守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て  
守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て

一備中守廣杉を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て

一備中守廣杉を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て

一備中守廣杉を以て守多治守之丞を以て守多治守之丞を以て





らあろふ所は承知仕る彼方ハ  
早川存徳を承知

早川存徳を承知

本亦曰先し

十三日下田ニ於て令衆國の三三

多のたやの  
及のたや

取々条の由ニ件いしは

老くおの根之共元さかあ

云々長ければ

そと山々をく  
又本亦曰先し  
早川存徳を承知







あつたは好く日暮を以て居るに似たり丹波を以て

亞墨利加使節の献上

一銀函

一室

一各款繪本

一冊

一宝遠鏡

一

一硝子火爐

一

一批抄巻

一室

一鱒油漬

一

たつたは好く日暮を以て居るに似たり丹波を以て

國書初解

亞墨利加合衆國の大統領フランクリンピルニ

至大善良の朋友ある日本帝陛下に

余合衆國の産物と陛下大邦の富饒ある産物と

の交易少就合衆國と日本との成盟を大に簡便

ちとめて安全を以て修むる事を思ひ出せり

余是を以ては書翰の審者としては邦の都人

タウンセント。ハリス大に選用したる是既合衆國の

コシエル・シテレルとあり陛下の外國事務宰相の信用

する者なれば陛下の事を定する所の宰相及以他の

将官と共に國書を商量せんが爲なり

余は従<sup>ラ</sup>誓<sup>盟</sup>の儀を一致し得<sup>ル</sup>事<sup>を</sup>信<sup>ス</sup>  
其<sup>の</sup>誓<sup>盟</sup>は合<sup>衆</sup>國<sup>と</sup>日本<sup>との</sup>和<sup>親</sup>の終<sup>以</sup>を<sup>得</sup>  
且<sup>永</sup>く<sup>一</sup>善<sup>ふ</sup>其<sup>の</sup>利<sup>益</sup>の<sup>為</sup>ふ<sup>彼</sup>我<sup>の</sup>間<sup>に</sup>互<sup>に</sup>市<sup>の</sup>  
交<sup>和</sup>を<sup>増</sup>進<sup>ス</sup>べ<sup>し</sup>と<sup>ス</sup>

余<sup>陛下</sup>の<sup>慈</sup>惠<sup>を</sup>以<sup>て</sup>ハ<sup>ル</sup>ハ<sup>リス</sup>を<sup>受</sup>け<sup>我</sup>の<sup>為</sup>  
ハ<sup>リス</sup>の<sup>陛下</sup>に<sup>為</sup>る<sup>一</sup>得<sup>ル</sup>凡<sup>て</sup>の<sup>預</sup>定<sup>を</sup>全<sup>く</sup>信<sup>用</sup>  
せ<sup>し</sup>る<sup>事</sup>に<sup>信</sup>ず

余<sup>神</sup>不<sup>向</sup>て<sup>陛下</sup>を<sup>神</sup>慮<sup>ハ</sup>全<sup>く</sup>ハ<sup>ル</sup>め<sup>而</sup>て<sup>聖</sup>妙<sup>に</sup>  
保<sup>護</sup>せ<sup>し</sup>め<sup>ん</sup>事<sup>を</sup>誓<sup>信</sup>す

此<sup>贈</sup>書<sup>は</sup>余<sup>合</sup>衆<sup>國</sup>の<sup>信</sup>印<sup>を</sup>押<sup>し</sup>而<sup>て</sup>華<sup>盛</sup>頓

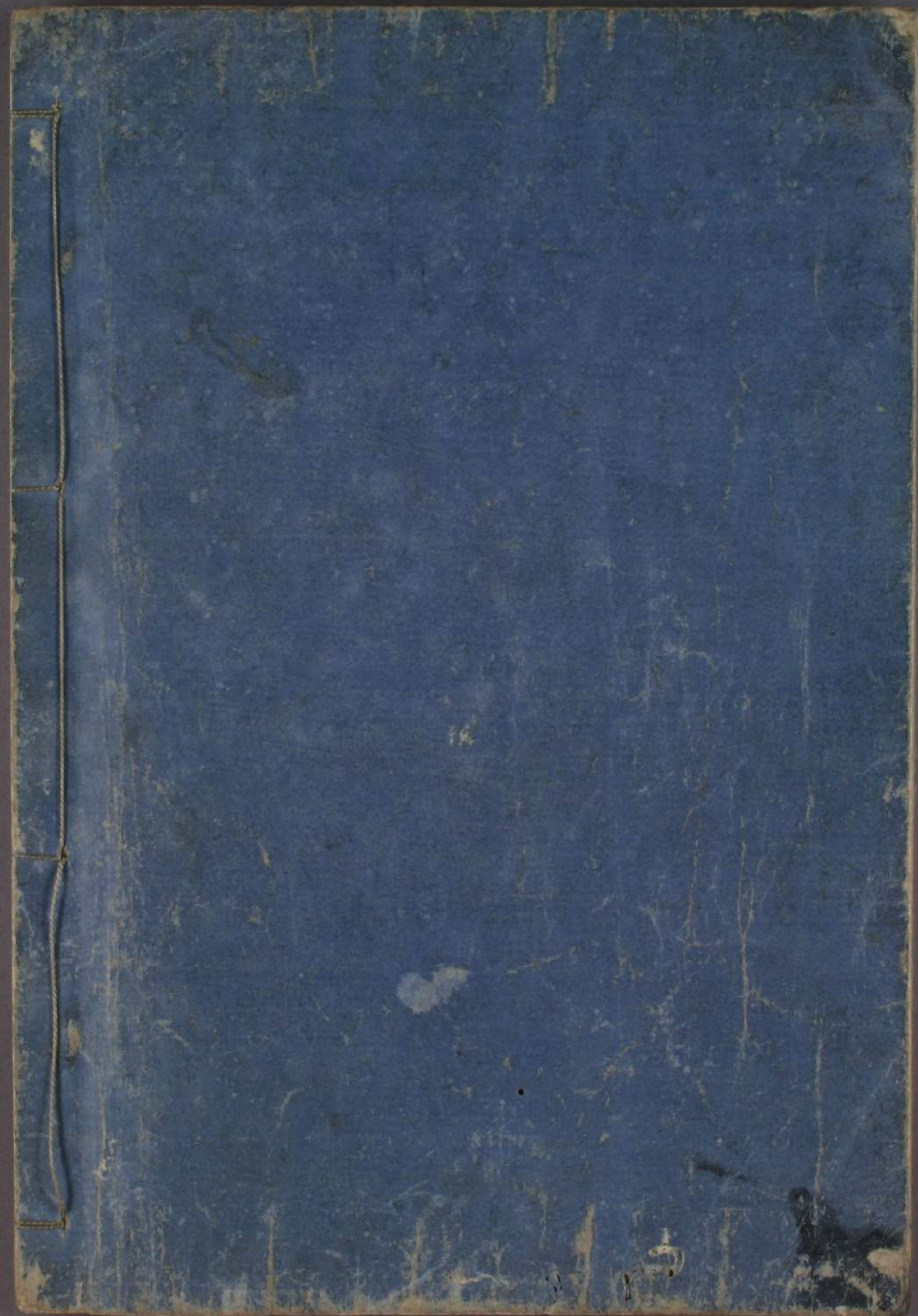
の<sup>都</sup>少<sup>て</sup>基<sup>く</sup>

紀<sup>元</sup>の<sup>一</sup>千<sup>八</sup>百<sup>五</sup>十<sup>五</sup>年<sup>第</sup>九<sup>月</sup>十<sup>二</sup>日<sup>に</sup>ハ<sup>シ</sup>

此<sup>書</sup>を<sup>記</sup>す

フランキリン。ピールシ

見聞近錄 歐陽永叔 張安道 王素 除諫官 君漢以詩  
三人薦於上 每除諫官 時為一棚鷓  
博物志 豹死守窟 不忘本也



安政  
四

號 番 簿 原

畫 名 書 假

來政己公外漢録

期 行 發 著

安政己年

數 冊 卷

冊 門 卷 部

種

別

考 備